

文化財ニュース No. 31

発行 加古川市教育委員会

編集 社会教育・文化財課（加古川市加古川町北在家23-1 TEL 24-1151）

新たに3点を市指定文化財に指定

教育委員会は、市内に残る文化財のうち歴史上、学術上価値が高いものとして、後述する3点を新たに市指定有形文化財に指定しました。

この間、文化財審議委員会（委員長・長谷川慶明氏）の慎重な審議と、さらには各所蔵者のご理解があったことはいうまでもありません。

このたびの指定は、昨年9月19日から1か月間加古川総合文化センターで開かれた特別展「いなみ野の仏教美術」で多数の仏教美術品が公開展示されたことが契機となりました。加古川市仏教会の賛同を得、各寺院のご協力をいただいて展示資料の調査を行なったところ、思いもかけなかった古い時代の文化財が市内にまだ残っていることが判明したのです。

特に、今回指定した文化財は、奈良国立博物館にも調査をお願いし、時代考証に万全を期しました。その結果、いずれも室町時代以前すなわち1392年以前の作品であることがわかりました。

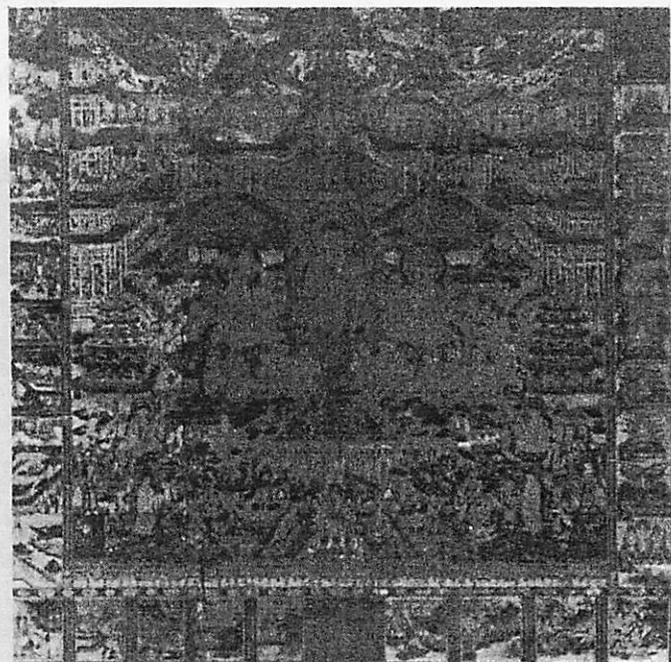
特別展で展示されたその他の文化財につきましても、貴重な資料であることには変わりありませんので、今後手順を踏んで順次指定させていただき予定にしています。また、今回は縁なく展示することができなかった貴重な文化財がまだ市内には数多く伝えられていると思われまますので、引き続き調査を行ないたいと考えています。

それでは、新たに市指定有形文化財に指定した文化財を紹介しましょう。

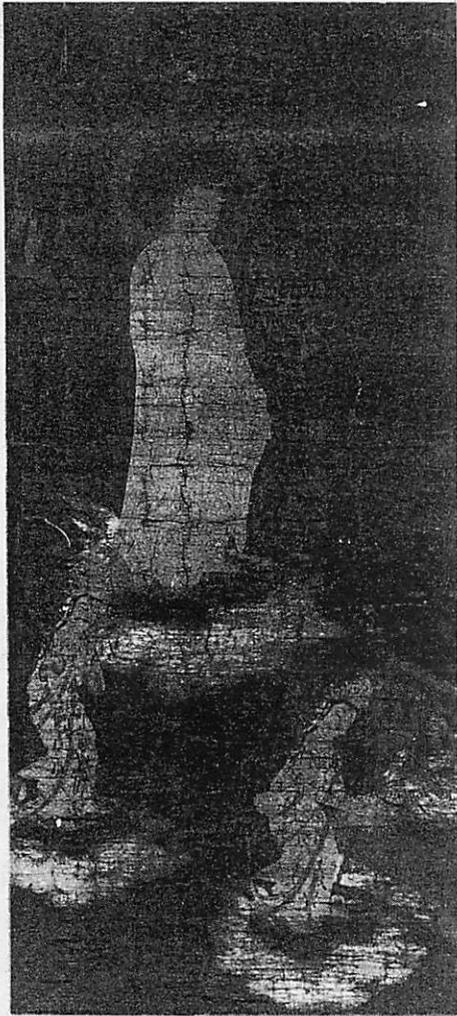
まず、加古川町平野の龍泉寺（酒見真暁住職）蔵の当麻曼荼羅図（たいまんだらず）ですが、軸木が削られていて判読が困難ながらも、かすかに残る墨の跡から元応元年（1319）の作品と推定しています。大きさは縦横とも120cmの方形で、絹地に図が描かれており、江戸時代の正徳5年（1715）に修理されていますが、今後なお手を加える必要に迫られています。

当麻曼荼羅図は、奈良県にある当麻寺の曼荼羅図があまりにも有名なので、これに類する図柄を総称しています。浄土三部経の一つ観無量寿経の要素を図式化しており、経典の内容を民衆に説く際説明資料として利用したもので、観経曼荼羅図とも呼ばれています。

図中央の阿弥陀三尊は金彩を施しており、図全体としても丁寧に描かれた優れた作品です。



当麻曼荼羅図（龍泉寺）



阿弥陀三尊来迎図（常楽寺蔵）

次に、東神吉町神吉の常楽寺（勝山俊住職）所蔵の阿弥陀三尊来迎図（あみださんそんらいごうず）ですが、南北朝時代（1331～1391）の作品と推定しています。大きさは縦92.2cm、横38.5cmで、絹地に彩色されています。

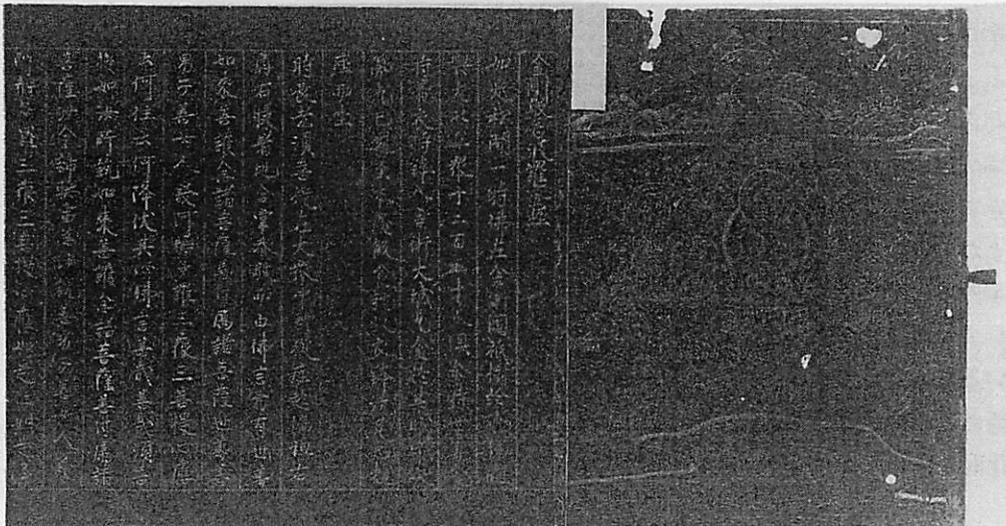
平安時代後期以降になると、極楽浄土を願う信仰が高まりましたが、来迎図の普及はそのことを反映しています。阿弥陀如来が衆生を極楽の世界へ導くために迎えに来る、という図柄になっています。

この作品は、上部に阿弥陀如来、左下に勢至菩薩、右下に観音菩薩を配置しており、三尊とも皆金色で描かれています。特色としては、屋形で座っている往生者が十二単衣（ひとえ）を着た女性であること、往生者と観音菩薩が近接して描かれていることです。

3点目は、加古川町北在家の鶴林寺（吉田亨盛住職）所蔵の紺地金字金剛般若波羅蜜経（こんじきんじこんごうはんじゃはらみつぎょう）です。大きさは縦25.5cm、横669.0cmで、鎌倉時代の作品です。鶴林寺は国宝、重要文化財など多数の文化財を所蔵することで全国的にも有名ですが、市指定は初めての事です。

この経巻は、紺色の紙に、表紙は宝相華文を、見返し部分は釈迦像や楽器などをともに金銀泥で描いています。経文の部分は銀色の罫線を引き、金色で1行17字の般若経を書いています。軸は八角形で、上部は紫檀の螺鈿（らでん）、下部は水晶を使っています。

これは、新薬師堂を建立寄進した大阪の医師津田三碩の遺品として、延宝8年（1680）に寄贈されたものです。「平清盛公 金剛般若経一巻」と貼り紙がありますが、真偽のほどは確かではありません。



紺地金字金剛般若波羅蜜経（鶴林寺蔵）

中道子山城跡発掘調査(第一次)終わる

中道子山城跡は、志方町広尾と岡の北に広がる山地で最も高い「城山」にあり、古くから中世の城跡として知られています。このほど教育委員会では国・県の補助を受け、城跡の構造や築城時期解明の発掘調査を行いました。また、城跡を総合的に考察するため、調査委員会(委員長・石田善人岡山大学教授はじめ8名)を設置しました。

発掘調査は1月18日から3月7日にかけて実施しました。期間中の2月11日には調査委員会の現地指導を受け、2月28日には現地説明会を開催しました。説明会には100名ちかくの方々が来られ、鋭い質問や意見が飛び交いました。それでは、今回の調査で判明した事柄を記すことにします。

中道子山城跡は、本丸・二の丸・三の丸から構成されています。本年度は第一次調査として「本丸」部分の発掘と、城跡の詳細な図面作成の基礎となる航空測量を行いました。発掘は自然環境をあまり変更しないように、溝状に一定の幅で掘ることになりました。そのため、本丸全体の構造が完全に把握できたわけではありませんが、今まで言われていたのとは異なる新しい発見がありました。

その新しい発見とは、まず城には石垣があったことです。現在の城の斜面は土で覆われ、その上に土塁が造られています。調査開始前は、城は土の塀を防禦施設にもっているだけと考えていました。ところが本丸の斜面にトレンチを設定し掘削すると、そのすべてから石垣が検出されました。だが石垣は元の姿を残しておらず、それは壊された状態でした。しかし、本丸西で完全に残る石垣を発見しました。石垣は高さ1mで



最初に築城された時の石垣



城内を区画する石垣

長さ3mまで確認しました。この上に高さ約2mの土塁が造られています。このことから山城が築かれた最初の景観は、見上げれば岩盤上に白く輝く石垣があったことでしょうか。土塁が築かれたことによって、石垣の城から土の城に変わってしまったのです。そして、本丸の面積も大きくなり、現在見る丸みのある地形になってしまったのです。また、本丸内を区画する石垣も発見されました。

次の発見は、本丸中央部から礎石をもつ建物跡が検出されたことです。そして、建物の階段ではないかと考えられる石列がありました。ここからは、中国製の青磁器片・明代の染付茶碗や備前焼の鉢・甕の容器とともに瓦も出土しました。また貝・焼き米も出土しました。本丸はある期間居住地となっていました。この建物は火災にあい、その時に石垣も壊されています。

それでは今回の調査から考えられる城の時代は、いつごろでしょうか。まだ全体の整理が終了していませんので断定はできませんが、出土した遺物は16世紀を中心としており、室町時代中期から後期にかけての城と考えられます。これらから築城者を考えると、孝橋新五郎繁廣が浮かびあがってきます。中道子山城は「赤松氏」につながる豪族の居城であり、本丸に建つ記念碑の銘文も、このことを証明しているようです。

本丸の調査は終了しましたが、それから得られた資料は今までの見方を一変させました。中道子城跡は、最初居住性を重視した山城から、後に土塁をもつ防禦性にとむ縄張りへと変遷したとも考えられます。まだ調査は始まったばかりです。今後より具体的な事実が浮かび上がってくることに期待したいと思います。

溝之口遺跡の発掘調査 ―集落の構造をつかむ―

溝之口遺跡は加古川バイパス工事中に発見され、以後宅地造成に伴って調査を継続しています。その結果、遺跡は弥生時代前期から平安時代の大きな集落跡であるのが判明してきました。そして、昭和62年度も3件の発掘調査を実施しました。

今回の調査からは、加古川では初めて「周溝墓」が発見されました。周溝墓とは弥生時代を中心に造られた墓で、方形に溝が巡るのを「方形周溝墓」、円形になるのを「円形周溝墓」とよんでいます。この溝は、墓に土盛りをするために掘った穴なのです。調査から、方形7基・円形3基の周溝墓が発見されました。これは弥生人達の家族の墓です。溝之口遺跡に住んでいた人の数は解りませんが、今後周溝墓は増加すると考えられます。周溝墓の溝からは、供え物を入れた土器が出土しました。これから墓の時代は弥生時代中期でした。また、住居跡も4棟発見され、その一つは直径約8mもある大きなものでした。別の住居からは勾玉の形をした長さ23cmの石製品が発見されました。

古墳時代の住居は、ベットをもった一辺7mの方形

をしていました。溝之口遺跡では、古墳時代のものは少なく興味のある資料です。

昭和58・61年に、奈良時代の大規模な建物群が発見されています。これは正殿のような建物を北にし、その南に向かい合う形で方形に建物を配置しています。今回は倉庫が発見されると予想した場所で、2棟の総柱建物が見つかりました。そして、建物群を取り巻いていた柵列も検出されました。このような整然とした配置をもつ建物群は、古代役所か豪族の館と考えられます。建物群は平安時代まであったことがわかりました。この場所から「石帯」が出土しました。これは帯飾りとして使うものです。古代貴族・役人の位に応じて金・銀・銅・石の順に使われました。石帯は、調べると無位無冠の人が付けていました。昭和58年には銅のものが出土しています。

今回の調査により、奈良時代の建物群の主要部分をほぼ解明したことになります。この資料に検討を加えて、さらに詳細な遺跡範囲を究明し、埋蔵文化財分布地図・報告書に表現したいと考えています。



溝之口遺跡の周溝墓(右)と倉庫・柵列(左)